それを一言、訓練の結果と言いたがるのは、馬とのつきあいがないためであろう。良造はゆっくり尻尾を振る馬たちに微笑み、背を叩き、なで、飼い葉を見、馬糞を掃除するまでやった。本当は各馬の調子も見てやりたかったが、それだけの時間はなかった。そこは同じ騎兵科の当番兵に任せるしかない。騎兵士官は代わる代わる、馬の面倒を見に来て馬の士気がくじけぬよう、努力をしていた。

馬たちの吐息か、馬糞の熱のせいか、馬房は少し暖かい。そのせいか分厚い手袋をつけていても、両手指がかゆかった。軽い凍傷だと分かってはいるのだが、どうにもできない。熱い湯に手を浸すのが一番の養生と心得てはいるのだが、湯も火も薪も貴重品であり、早々にありつくことは出来なかった。

馬の白い息を見ながら、背を撫でて寒いなおいと話しかけた。馬は耳を振って返事した。まったくもって良く出来た馬であった。戦争が終わったらこの馬の払い下げを受けようかと思うほどである。

「今日、釣りの散歩はナシだ。ごめんな」

そう言った後で、言葉を続ける。

「いよいよ敵の攻勢だよ。お前達。報告は何度もしたのに結局何の応援も来なかった」

良造は笑いながら言った。人間を心配してか、馬は良造に頭をすりつけ、気遣った。

「せめて走らせてやりたいが、どうにも敵が多くてな。ちょっと苦労かける。悪く思わないでくれ」

良造が鼻面をなでながら言うと、馬たちは心配するなと尻尾を振りながら頭をすりつけた。良造は泣きたくなったが、当番兵たちが居る手前、微笑むだけで我慢した。

また一緒に走ろうねと、子供のように手を振った。

実際一発の砲弾で馬が全滅したり、自分が死んだりすることは充分にありえたが、一流の騎兵が馬に接する時には、憶測や大人の都合を都合良く棚にあげるものである。良造は一流の騎兵だった。馬房を出た後で、俺は生きられるかなと考えた。

芝村裕吏
遙か凍土のカナン

illustration しずまよしのり

第壱巻 1

この世の全ては、一人の可愛い女がいれば大抵どうでも良くなる。

お付きがいない世界

公女オレーナは深窓の令嬢であった。深窓の令嬢たらんと教育されていた。

出自を嫌われてか乗馬は許されず、銃の撃ち方も用兵も教わる事がなく、只々飼い主の顔色を窺い、レースを編み、ダンスを嗜み言質を取られぬ喋りを磨きドイツ語の勉強を強いられ続けた。いつしか顔に笑みが

浮かばなくなり、物憂げな目をするようになった。太陽の下におらぬものだから、鼻の上のそばかすは消えてしまったけれど、代わりに白蠟の人形か白磁の陶器かという風に、肌がどんどん病的に白くなっていった。そしてそれこそを喜ばれた。

鏡を見ながらため息をつく。両手いっぱいに向日葵を抱え、どこがどうだか分からぬまま歩き続けた幼い日を、オレーナは窓の外を見ながら思い出す。別に怖くも無かったし、飼い主が言うほど不幸でもなかった。どこがどうだか分からぬでも、どこかにたどり着いた先で農作業をしていた大人たちは親切であったし、何より行く先を指示されるのは嫌いだ。オレーナはそう考える。見世物になるのも嫌だった。さらに数年が過ぎオレーナが美しくなるごとに、走ることなど覚束ないような長いスカートを穿かされるほど、その表情は沈み、窓の外を見ることが多くなった。美しくなるのは彼女の願いではなかった。

心の慰めは幼いウラジミールが心配げに様子を見にくること、それと一緒に平民出の将軍が遊びに来てはマッチ棒を組んで家を作ったり、あるいはシベリアの珍しい犬を連れてきたりすることだった。

平民出の将軍は、齢そろそろ六〇になる。素朴な質で素朴な事を笑われる事も多かったが、オレーナもウラジミールも、この将軍が大好きであった。直ぐに魚を食べさせようとするのには閉口したが、それ以外に不満は無かった。

将軍から用兵を教わりだしたのは一二の頃、古代ギリシャの戦いを例にしてであった。飼い主に見つかればただでは済まなかったろうが、将軍は素知らぬ顔で教え続けた。また、屋敷を出ることができぬ彼女の目として、世界の珍しきを教えもした。

それで、彼女の心に翼が生えた。いつしかオレーナは、己の翼で飛んで行くことを夢見るようになった。夢を見るだけでなく計画し、ゆっくり準備を整えることもやりはじめた。夢を夢で終わらせるのが、嫌で嫌で仕方なかった。心の中ではオレーナは将軍であった。公女将軍である。

公女将軍は考える。勝算はある。一つは順調に馬鹿を作っていると飼い主が思い込んでいることである。もう一つは敵国である。

なるほどこの国はいくつもの子午線をまたがって存在する大帝国だが、未だ征服されぬ国もある。抵抗をやめず、武器をとって戦う、愚かかもしれぬが立派な国もありはする。そこに逃げ込みさえすれば、追っ手はかからぬはずだった。逃げ込む先は異教徒の国故、天国とは言えぬであろうが、おとぎの国くらいではあるだろう。そんな事を考えた。

最後の勝算は、自身の美貌だった。望んでなったわけでも願って磨き上げたわけでもないが、多年に渡り苦手ながらも訓練は受けてきた。これを予備兵力として決戦を挑まんと考えた。

私は悪凶。オレーナは思う。

自由のために身を捨てる。自由にはそれだけの価値がある。

手紙

藤子様へ

男子一生の仕事と書けば笑ふ者もいると思ひますが、余はその様に思って奉職を続けて参りました。

大した理由から騎兵を目指した訳ではありません。たまさか麹町にて立派な糞をする馬を見て、それを笑ったからです。郷里にて馬の世話をするのも、陸軍にて馬の世話をするのも、大して変わりないと思ひ、それで騎兵になろうと兵舎の門を叩きました。駒場の農学校を蹴って軍人となる変わり種は余しかおらず、か

生とゝの後は世界米の土官として教育を受け直を要と聞けたようの造に署名を改める頃には騎兵科に進ん。

日露戦争を眺め、陸軍は大量の官僚を必要としているのである。良三は良造に署名を改める頃には騎兵科

馬房は最前線にも拘わらず平穏な様子であった。汗を掘り、木組みをし、さらに上から土を盛り、踏み固められると一人軍馬に床の時代の木材を敷いていた。一間ほど全部強固に仕上がっている。それが明治の軍馬である。明治の日本は、鐵道の輸入をやめて直しているが状況は激減し、また品種改良も遅く四〇年近い時が流れたなんで江戸からの長人軍馬はどんどん死んでいった。そのうちまもなく四〇年近い時が流れたなんも、軍馬の生産はまりまくいっているとは言えず、輸送馬はまだしも軍馬と名乗れず一〇〇頭ほどいるぜ。

ウ、ウ、ウ、